

## 青葉区木町地区民生委員児童委員協議会

(平成 25 年 11 月 12 日掲載記事)

### (1) 現在の復興状況

震災より 2 年 6 か月が過ぎ、本地区は復旧を終えて平常に戻っています。仙台市中心部に位置し、沿岸からは離れており、地盤も強固だったため、建物の倒壊はほとんどなく、震災時も都市ガス・水道などインフラの問題はありましたが、それも時間とともに解決しました。

### (2) 被災者の様子

現在、福島県の原因事故避難区域からの避難者や沿岸部の避難者 56 世帯が民間の借上げ賃貸住宅（みなし仮設住宅）にお住まいです。流動的な環境のもと、さまざまな事情を抱え、暮らしの不安や悩みは深く、人前に出ずにひっそりと暮らしておられる方も少なくありません。なかには被災者だと知られたくないという方もあって、その心の痛みは想像以上に大きく、癒しには長い年月が必要だと感じます。隣人同士が短い挨拶のみのつき合いで終わるような都市化された日常で、被災者が人とのつながりや仲間意識を持てずに引きこもりがちにならないよう見守りを続けています。

### (3) 民児協の活動

個人情報保護により被災者の住所、氏名の全件把握は困難です。幸い仙台市社協が平成 23 年 12 月に「地域支えあいセンター事業」を立ち上げ、青葉区 12 か所の市民センターに地域の巡回相談所が開設されて、週 1 回程度の支援情報提供と困りごと相談が実施されています。

そこで本地区では、この事業に参加されている被災者の方々を対象に、「いきいきサロン」の活動を 2 か月に 1 回の割合で催しています。同郷の方と会える場、あるいは外出の機会として活用している被災者の皆様からの感謝の言葉や和やかな笑顔に接すると、心のケアの一助として役立っていることを感じます。

ただ、最近は参加メンバーが固定化してきており、参加されなくなった方々の動向が気に懸かるところです。



地域のいきいきサロンで腹話術の上演を紹介。その後実演していただきました。

#### (4) 皆様にお伝えしたいこと

震災直後は避難所の立ち上げと運営が最大の課題でしたが、同時に高層の集合住宅に住むひとり暮らし高齢者の支援が重要かつ優先すべき取り組みとなりました。

戦後の食糧不足を経験された高齢者の多くは、2、3日は自宅を動かずただ耐えて過ごします。そんななか、町内会や自治会組織の働きかけとともに、普段から関わりが深く、馴染みのある民生委員が顔を出す安否確認は住民の皆様にとって、ほっと安堵する瞬間だったようです。持参した非常食や果物も大変喜ばれました。

しかし、避難所に送られてくる支援物資や食糧の配布は避難所入所者が主たる対象であり、自宅待機者に配るためのまとまった数を、民生委員が朝夕毎回受け取りに通うというのは、なかなか難しい状況でした。日頃から非常時を想定し、他団体の方々に民児協活動への理解を図っておく必要を感じました。

最後に、市社協が設置した青葉区災害ボランティアセンターから派遣された学生たちの若い力が多いに役立ったことを特記したいと思います。民生委員・児童委員は年配者が多く、個々の家庭事情等で災害時にすぐには動きが取れない場合もあります。また、高層ビルの上層階にペットボトルや食糧品を配布するなどの活動では若手の力が絶対に必要です。今後の災害時にはぜひとも災害ボランティアセンターの速やかな設置を望むところです。